



生物多様性ホットスポットの現場、 インド西ガーツ山脈の保全活動 (SATOYAMAイニシアティブ)

天野 陽介／国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)

ヒンドゥー語で「階段」を意味するインド・西ガーツ地方に位置する山脈は、熱帯モンスーンの影響で雨が多く、豊かな森林生態系を有し、植物の38%、両生類の78%、爬虫類の62%、ほ乳類の12%が西ガーツ地方固有の種として確認されている。特に北部では森林のほとんどが私有地であり、保護地域として守られている面積は0.6%～5%にすぎない。

森林や生物多様性を維持することの難しさ

この地域では薪炭の生産が重要な収入源である他には現金収入を得る機会が限られている。また、インドの急速な経済成長と人口増加に伴う需要の増加によって、森林の伐採と農地への転用が進み、残存する森林が減少、分断されつつある。

「ここ10年の間で、インド国内でも生物多様性や生態系サービスの認識は高まってきている。だが、農林漁業など自然資源を直接利用して生活する人々にとっては、理解はできても、行動を変える事は容易ではなく、結果的に彼らが生態系劣化の直接的な原因となっている」。こう語るのは、インドの応用環境研究財団(Applied Environmental Research Foundation, AERF)の共同代表であるジャヤント・サーナイク氏。こうした中、AERFは、住民が望む安定した収入源の



Terminalia belliricaの果実を加工する地元住民

確保と生物多様性の保全との両立を目指し、保全上重要な植物を持続可能な形で利用する新たなバリューチェーンを模索した。

新たな価値の創出へ

始めに住民を交えてのワークショップを開催し、薪として伐採されていた樹木の新たな利用方法について検討した。その結果、Terminalia bellirica(シクシン科)は乾燥させた果実からお茶が作られ、Pterocarpus marsupium(マメ科、英名 Indian Kino Tree)は、枝をコップに加工し、加工時に出る木くずからはお茶が作られた。このコップは、水を一日貯めておくと、コップからしみ出す成分によって水が赤色に変色し、糖尿病などに利く水薬になると言われている。これには海外にも需要があり、これまでに計500個が販売された。樹木の一部のみを利用することによって、樹木そのものは守られ、現在、Terminalia bellirica 500本とPterocarpus marsupium 200本が住民によって守られているという。

このように生物多様性の保全に貢献する製品を「My Forest」という名前でブランド化するとともに、さらなるビジネスを生んでいくための支援団体「Nature Connect」が立ち上げられた。プロジェクトに参加した地元住民の収入を増やすことができ、さらに、この活動に賛同する民間企業からの支援も約束されているという。革新的なアイデアで、手間を惜しまなければ、私達人類は、自然と共生する社会に一步近づくことができることを示してくれる好事例である。

天野陽介(あまの ようすけ)

国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)にて、国際SATOYAMAイニシアティブ・プロジェクトに従事。「SATOYAMAイニシアティブ」とは、日本の里地里山のような、持続可能な状態で農林漁業が行われる地域(社会生態学的生産ランドスケープ・シースケープ)を維持・回復することで、人と自然との共生の実現を目指す国際的な取組。UNU-IASは、SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ(IPSI)の事務局機能を担う。